

一〇ノ五、ふぢ河の記

出典 中世日記紀行集 新日本古典文学大系五一 岩波書店

解説 元弘の戦いから約四十年後、この記を著述した一条兼良（応永九年〜文明十三年 一四〇二〜一四八一年）は相続く戦乱の世にいやけをさして関白太政大臣の栄職を辞し、息子で大乗院寺社雑事記を書いた興福寺大乗院の尋尊を頼って十年間奈良に隠遁した。

その間、彼は文明五年（一四七三年）五月二日、美濃方面の旅行に出発しての帰りみち、伊賀上野で宿泊した後、早朝に出立し島ヶ原、大河原、笠置を経て、二十七日ぶりに奈良に帰着した。

兼良は笠置山の麓を通りながらも笠置山に登らないで、今回は急ぐから改めて詣でようとそのまま素通りした。この旅行記によるとまだ信仰の対象としての笠置寺は存在してはいたものの、貴顕の人を魅了する状態にはなかったであろう。

しかし、笠置を後にしての兼良の詠に「雲の上はその曙を待程や笠置の峰に有明の月」というのがある。早朝の風情に託して、はるか未来にその暁（弥勒下生の旦）を待っている今、笠置の峰の上に有明の月を仰ぐことだ、との意か。このように解すれば弥勒磨崖仏は焼失してはいるものの、貴族階級において、笠置寺における弥勒信仰はまだ廃れてはいなかったことになる。

原文

廿八日（文明五年（一四七三年）五月二十八日）、菩提寺を発ちて上野、小田など云所を通る。田山越えは川の水いまだ渡りがたかるべしとて、笠置通りに赴く、嶋の原川といふ河を渡りて、

島の原川瀬の浪の徒渡り田山越えをばよそになしつる

大河原といふ所は、伊賀と山城との境なり。河原の木石、さながら前栽などを見る如くなれば、

苔むせる岩根に松は大河原変らざりけり庭の洲崎に

笠置川をば舟にて渡る。奈良より迎への者、来たるによりて、伊賀の送りをばこれより返しぬ。帰路を急ぐによりて、山をば見やりたるばかり也。ことさらにこそ詣でめと思ひ侍り。昨日今日は雨降らず。

えぞ知らぬ美濃山過て降り雨の笠置に来ては又晴れにけり

雲の上はその暁を待程や笠置の峰に有明の月

乗燭（夕方）の時分、南都の宿坊に着く。この後、雨甚だ下る。よくせずば、笠置に泊るべかりけり。